

金曜コラム - 李ギョンリョル (体育市民連帯事務局長)

当年にとって 37 歳。今年の初めからひどく三十七歳病を患っている。三十七は 30 歳より遠く 40 歳に非常に近くなった年齢で、国家施策青年福祉事業から除外されている年齢でもある。同い年の友人はほとんど職場生活 10 年目を越えている。特に昨年末から昇進する人が多い。みんな車を変えてより広い坪数に引越しをした。

それに比べて私は金より価値と自己実現を追求して生きてきたし、今この瞬間にも頼りない貯金通帳を太い綱のようにつかんで中古小型車購入を前に地団駄を踏みながら悩み続けている状態だ。このように生きながらこの状態のまま、あるいは、より悪くなった状態で四十を迎えるのか。来るべき四十があまりにも恐ろしく感じられた。日を追ってますます衰える両親が頭に浮かび、世の中から一人、とり残されてやつれ果てた自分の姿が一日に数十回以上頭に浮かんだ。そのたびに、私の心はすべての感覚と神経が切れてしまう勢いで悲鳴をあげた。夢の中でハサミを当てられるのが恐ろしいことであるように、心の中の叫びに押された日常も最悪だった。

すべての感覚が正常に動かなかった。特に眠る事と食べる事がとてもひどかった。この時期の睡眠は睡眠ではなく、衝撃に気を失って倒れたかのような過酷な不安と恐怖に疲れ、しばらくぐったりしている格好だった。酒を飲むと頭が割れるように痛かった、脂っこい味の濃い食べ物を食べて根が露出した歯茎のように下腹が痺れた。好きだったコーヒーさえ少しだけ飲み込んでもエレベーターでバスケットボールをはじくように心臓が揺れてガンガンしていた。

一ヶ月が経っても症状が良くなる兆しが全く見えなかった。こうなっては元に戻すのが難しいほど日常生活が崩壊しそうだった。それで親交のあるスポーツ心理専門家に助けを求めた。20 分あまり、泣きそうな私の声を優しく受け入れてくれた彼は電話を終える頃、小説を読む事と汗をかく程の強度の運動を勧めてくれた。

貴重なアドバイスだったが当時の私は小説を読む余裕がなかった。例えば 1 時間以上、座っていられなかった。体を動かさないでいると心臓がますます膨らんで、首を突き抜けて出てきて顔全体を覆うようだった。仕事しながらも頻繁にトイレに出入りし、心臓を抑えるために一日に 2 万歩は基本、多ければ 4 万歩も歩いた。パンパンに空気を吹き込んだ大型チューブの風の音のように、暇さえあれば膨らむ心臓を足でぐっと押えていたのだ。

私に残った選択肢は汗ばむ運動しかなかった。歩いて汗をかかない、冬将軍もマスクを使うような 1 月だったため、ジムのランニングマシンで走る方法を選んだ。最初は 20 分のランニングも大変だったが 2 週間ほど過ぎると 30 分も走れるようになった。そうして半月ほど続けて 30 分を走ったある日だった。ランニングマシンから降りてすぐガクッと座り込むほど左ひざが痛かった。膝が憎かった。汗が出るほど運動をして思い切り走ろうとしたら存分に走れたのに、私の膝のランニング使用期限は賞味期限 10 日の紙パック牛乳と同じだった。

幸いなことに膝の痛みは三週間で消えた。私は再び走った。代わりに前のように徐々に速度と距離を増やす希望のランニングというものでは無く、全く同じ速度で走る無常のランニングであった。走って膝が鍛

えられるには、長ければ10年もかかるだろうという悲観を想起して息の代わりにため息を吐き出した。このような状態で4月末、新日本スポーツ連盟（New Sports Federation）の神奈川県支部の国際平和スポーツ交流事業の一環として招待されたマラソンイベントに参加することになった。私は体育市民連帯所属で4月28日川崎月例マラソン5km区間、4月29日は横浜駅伝5km区間を走った。何か劇的な変化を言うようですごく恥ずかしいが、私は日本の大会参加を通じてランニングと生きる方法を学んだ。日本から帰ってきた後、少なくとも週に3日はランナーを夢見走っている。

新日本スポーツ連盟は1965年に創立された非営利団体である。高価な民間スポーツクラブに負担を感じてスポーツ活動が困難な人にスポーツ活動を支援し、その参加を拡大することを目的とした、いわば労働者、庶民を対象としたスポーツの権利の増進を追求している団体である。現在この団体が日本全国各地で運営するスポーツクラブの数は4000に達し、会員数は5万9000人にのぼる。最も人数が多い種目は登山で、続いて卓球、スキー、サッカー、水泳、バレーボール、バドミントンの順に全13種目で構成されている。私を招待してくれた神奈川県支部だけで会員数が4000人である。

この団体は、2010年から韓国とフランスの市民社会団体を日本に招いて、国際スポーツの平和交流を進めてきた。今年4月26日から5月1日まで行われた国際交流に金ドクジン体育市民連帯共同代表、朴ヘスク前体育市民連帯事務局長と現在の事務局長である私、この三人が参加した。

私は神奈川県ランニングセンターとウォーキングクラブ所属の50人の会員がマラソン大会ボランティアをする姿を見て、虚しいランニングの沼から抜け出すことができた。紙面の都合上、初めて参加した川崎月例マラソン大会で受けた感動と手本をとり上げて説明する。

この大会のボランティアはほとんど60歳、70歳代だった。彼らは終始穏やかな風貌で大会の準備と当日の大会運営そして整理まできっちり果たした。テント立て、折り返しの整備と誘導、申請者受付確認、飲み物や各種売店運営、記録確認等、すべてボランティアの手で行なわれていた。特に午後1時頃、大会がすべて終了した後の姿が本当に印象的だった。ボランティアはすべての荷物を車に積んで美しいほど完全にゴミ処理と分別を終えた。その後、巨大な大きな円形になって隊列を備えて別れの挨拶を交わした。主催側で用意してくれたお弁当を食べながらこの光景を見ていた私は、ふと彼らが、昼食を食べる時間なしで仕事をしたという事実を自覚することになった。ボランティアに食事もてなしもなく、このまま終わるのかとハラハラした。この感情は長くは続かなかった。挨拶を終えた後、ボランティアが一列に列に並び始めた。どんなことかという、ボックスに入れられた1人分の分量のそば炒めそばとビール一缶が入れられた白いビニール袋を受け取るための列だった。袋を受け取ってから、ある人は止めておいた自転車の前かごに袋を入れて車輪のロックを外し、ある人はエコバッグに袋を入れて家に帰った。その場で袋を解いて食事する人は一人もいなかった。みんなそれぞれの道に去った。

ボランティアのうち、マラソンフルコースはもちろん、ウルトラマラソンを完走した人がかなりなるという。私はそれを見ながらなぐさめを受けた。マラソン大会を完走するのと同じくらいに、このようボランティアをしながらマラソン大会を完成させることも明らかに心臓をときめくようにすることであるという事実。私もいつかはきっと走りたくても走れない日が来るだろう。しかし、いつものように世界は、いや私の住む町もいつも多くの人がランニングをするだろう。

マラソン愛好家でよく知られている小説家キム・ヨンスはランナーを「走りたくないとき走らず、走りたときに走れる人」と言った。私は川崎月例マラソンのボランティアたちを見て自分なりのランナーを定

義してみた。「走れるとき走り、走れない時にはランニングを準備してあげる人」

もう走れない状況を恐れなくなった。

だから、私はランナーを夢見るようになった。ランニングについての恐怖が消えた時がランナーに向けた出発点になったわけだ。昨日早朝に 8km を走った。走っている間ずっと、生活への不安が消えた時にはどんな出発点が起こるか、その時のことを考えたりした。

01 アジアの経済 2019. 5. 12

【 10年ぶりに再び呼吸合わせる人権の専門家、国家の責任を問う 】

2007年、ある女子プロバスケットボール監督チームが所属選手をセクハラしたという事実が明らかになった。翌年になって学校運動部の性暴力など性不正問題とそれをめぐって一線のスポーツ界現場の認識がどのレベルなのかを示すメディアの報道もありました。スポーツ界の素顔が明らかになり国民は驚愕しました。特定少数の逸脱も問題でしたが、そのような犯罪行為を眺める、スポーツ界の一部だというような態度は市民の多くを唾然とさせました。

国家人権委員会は体系的に対応するため、スポーツ人権 TF（訳注：Task force、特別委員会、専門調査団）を作成しました。全国単位の実態調査と人権教育をする一方、専門家で構成された協議体を作る制度の改善案を出しました。翌年中途脱落学生選手について実態調査をした 2010年には大学学生選手について調査しました。スポーツの分野に適した人権ガイドラインを作成し、教育・体育当局、大韓体育会などの体育団体に勧告しました。

人権委レベルでも意欲的に乗り出しましたが長続きしませんでした。就任前から人権委を目の敵にしていた李明博（イ・ミョンバク）政府は人権委の組織及び予算を大幅に削減し、締め付けました。学生選手などスポーツ分野の人権どころか人権という価値自体に言及しにくくなりました。就任初年度、牛肉輸入交渉過程でキャンドル集会在が浮上し、人権委は過剰に対応した警察など政府に苦言を呈しました。李明博大統領府はこれを気に入りませんでした。監査院及び行政安全部から組織を減らし、特定の人物を追い出そうとしたブラックリストもありました。人権委は、政府はもちろん立法及び司法など、どこにも属さない独立した機構であるという命題が崩れる瞬間でした。

2008～2009年、人権委の内外で騒然としていた時点では、学生選手及び引退選手などのスポーツ分野人権を積極的に見ていた人がムン・ギョンススポーツ革新委員会委員長とソ・ヒョンスソウル大研究員でした。ムン委員長は関係した政府の末期に任命された常任委員（次官級）であり、ソ研究員は人権委主管部門の事務官でした。

ムン委員長は外圧に苦しんでいた 2010年の任期を果たせず去り、ソ研究員はその前、2009年に人権委を離れ留学に行くと伝えられました。二人は 10年ほど過ぎた 2019年に再び手足を合わせる事になりました。人権の専門家である彼らが再び手を組んだことに、ひたすら喜ぶわけにはいきませんでした。山河が変化するように、スポーツ分野の人権が所定の位置ではなく、後退した状況をあちこちで見ることができたからです。

去る 7日に開かれたスポーツ革新委 1次勧告ブリーフィングでムン委員長とソ研究員は、一緒にマイクの前に立ちました。前国家代表コーチの性暴力問題が浮上して革新委が構成された後に出す最初の勧告であ

ることからメディアの関心も大きいものでした。勧告案は導入部で「民主化以後、一世代以上の間正しく改革しないまま放置した国の責任が大きく重い」と指摘しました。それとともに「革新委は、国家がすべての国民の憲法的基本権を保障する責務を果たさなかったことについて、痛烈に反省することを促す」と具体的な対策を注文しました。

「スポーツ界から独立した調査・懲戒要求機関を作り、専門的信頼性の高い申告受付・相談窓口を備えなければならない」という勧告を出して、一部からは既視感（訳注：実際は一度も体験したことがないのに、すでにどこかで体験したことのように感じる現象）を呼び起こすとの指摘があったが、勧告を開けてみれば、実際に一度も試みたことのない内容です。各種不正申告を受け付けるところは大韓体育会などの体育団体が自主的に運営しています。国家代表選手が活用するようなスポーツ人権センターの人権相談室は、選手たちが合宿する鎮川選手村内にあります。大韓体育会は過去「自浄運動本部」というものを作って運用したように、問題が発生すると外部の力を借りる代わりにスポーツ界自ら解決しようとする傾向が強いです。結果は私たちが見てきた通りです。

被害者が申告をしても助けられず、むしろ2次、3次加害を受けると感じるような構造であるわけです。スポーツ界ミートゥーが広がるまでスポーツ界の誰もこの奇形な構造を変える考えができない、いや、してきませんでした。革新委は1次勧告で、これまでのスポーツ人権保護対策について「2010年以降、人権委レベルの実態調査はもはや行われなかった（中略）大韓体育会の反発と形式的スポーツ権益センターの設置など、スポーツ人権ガイドラインの幅広い採用と実効性のある現場監視システムを構築してこなかった」と評価しました。

革新委はスポーツ界をはじめ、文体部及び教育部及び女性家族部など政府省庁の対応システムについても問題を細かく指摘しました。去る2月革新委発足後、文科別に定期及び随時会議を数十回開くなど、こまめに動いたためでもあります。過去この問題で深く掘り下げた人権専門家の働きが元となって可能となったというのが大方の評価です。スポーツ分野の特殊性、過去十数年間停滞した原因を分析したことはもちろん、米国のセーフスポーツ、カナダの赤い鹿宣言（訳注：調べましたが、この内容不明）など間もない海外実証事例を勧告のあちこちに入れるなど、時・空を貫く勧告案はこのように出されました。革新委は、このような勧告を来月末までに三、四回続いて発表する予定です。

*出典：<https://view.asiae.co.kr/news/view.htm?idxno=2019051211044058349>

02 毎日経済 2019. 5. 15

【 グリーンベルト内のジム・図書館許可面積2倍に大きくなる 】

今後、グリーンベルト内に入っているバドミントン場、図書館などの生活施設の規模が大幅に大きくなります。一方、模擬戦闘ゲーム関連施設の設置が制限されます。国土交通部は開発制限区域内の小規模屋内生活体育施設、図書館などの生活、社会間接資本（SOC）施設を拡大する内容を骨子とする「開発制限区域の指定及び管理に関する特別措置法」施行令の一部改正案が14日、閣議を通過して今月から施行されると明らかにしました。

改正案によると開発制限区域内の屋内生活体育施設許可面積は1500㎡から3000㎡で、図書館は1000㎡から2000㎡にそれぞれ2倍に増加します。また、都市民の農業体験とレジャー需要が増加する現象に合

わせて、グリーンベルト内に公営都市農業の農場と実習教育場の設置も可能です。これによるトイレ、駐車場などの付帯施設の設置も可能です。

逆に厳しくなった規定もあります。擁壁や石垣を作成する必要がある模擬戦闘ゲーム関連施設の設置が制限されます。また、当該施設を無くすには原状回復が必要です。キャンプ場に設置可能な施設の種類を管理室・共同キッチンなどと明確に規定して、全体の面積は 200 m²以下に制限しました。

国土部は早ければ今月末から改正された施行令を適用できると説明しました。国土部の関係者は、「今回の施行令の改正に開発制限区域内の生活 SOC が増え、地域住民の生活の質が改善されるだろう」とし「今後も生活体育施設など住民便益のための施設を拡大する方向で制度改善案を継続的に発掘する」と言いました。

政府は最近、グリーンベルトの問題について制限するばかりでなく、活用価値を適切に高める方向に政策目標を置いています。最近、大統領府などで、規制解除を通じた雇用創出の拡散などを掲げた雰囲気も一役買っています。

政府関係者は、「首都圏はすでにグリーンベルト毀損が相当進んでおり、無条件に食い止めるより適切な活用を通じた環境保護管理がより効率的な手段として評価されている」と言いました。

国土研究院は最近の報告書で、今後グリーンベルトを適切に活用するためには △住民の不便を解消する趣旨で小規模地域のグリーンベルト解除・管理 △開発制限区域解除事業の公共性強化 △2020 年広域都市計画解除総量の効率的配分などが必要であると主張しました。

*出典：<https://www.mk.co.kr/news/realstate/view/2019/05/316807/>

03 東亜日報 2019. 5. 15

【 大邱 FC と大邱市のコラボレーションに拍手を送る理由 】

ドイツのフランクフルトを訪問する韓国人旅行者が喜ぶ場所があります。まさに地下鉄駅です。そこで「韓国サッカーの生きた伝説」車範根の 30 年前の形跡を感じることができます。フランクフルトは縁故クラブの歴代最高選手を選定して現役時代の姿を駅の柱に装飾したが、車範根も堂々と名前があがりました。サッカーの英雄をモデルとして選ぶ前に、多くの悩みをしたはずだが、活気に満ちた都市のイメージを構築するのにサッカーほどのものがないという結論を下したのではないかという推測です。

スポーツを通じて都市を再生したケースとして多く言及されているのが、英国の代表的な産業都市シェフィールドです。1970 年代から急激に衰退期を迎えたそこは 1991 年ユニバーシアード大会を通じて、長い間固まっていた鉄鋼の町というイメージを脱して「スポーツ都市」に変貌しました。一時雇用が消え、高い失業率と投資不振の悪循環が続きましたが、各種スポーツイベントを通じて若い都市に変身することに成功しました。

スポーツは素晴らしい文化コンテンツです。その波及力は他の文化領域と比べてもひけをとりません。重要なのは利用です。スポーツ球団が本拠地とした地方自治団体がどのように活用するかによって、その価値は異なります。だから強調されるのが地方自治体と球団のコラボレーションです。

スポーツ施設は単に運動だけのためのスペースではありません。都市の経済的、社会的、歴史的意味が込められている文化遺産です。しかし、そこには条件があります。生命力を吹き込んで初めて光が出ます。大邱

FC と大邱市が都市再生事業のために手を取り合ったのは、このような認識の共有が根底に敷かれていたのです。サッカー先進国であるヨーロッパはもちろん、近くの日本でもサッカーを通じた地域社会の疎通と統合の事例はいくらでも見つけることができます。

今年、ホームスタジアムを DGB 大邱銀行パークに移した大邱 FC は球団イメージを都市のあちこちの文化コンテンツとして形象化させるために努力しています。大邱駅北区庁駅はすでに大邱 FC でいっぱいになりました。サッカーチームのチームカラーである水色の背景に「OUR CITY」、「OUR TEAM」、「WE ARE DAEGU」というスローガンとエンブレムが占めました。チョ・ヒョンウをはじめセ・ジンヤ、エドガー、ジョン・スンウォン、金デウォンなどスターたちが壁を飾っており、柱や天井には「DGB 大邱銀行パークへの道」という看板がつけました。

スタジアム周辺はテーマ通りとして造成されます。北区庁交差点～サムスン創造キャンパスまでの 910m 区間と北区庁駅～DGB 大邱銀行パークまでの 680m 区間がその対象です。ここには、ユニークなデザインの街灯とベンチなどの公共施設やサッカーを題材にした造形物を設置し、競技場を訪ねる市民に新しい楽しみを与える予定です。

このような努力は最終的に好循環につながります。球団のシンボル色だけでも市民の精神的な絆を強化することができます。またテーマ通りを通る市民は、自然にサッカーに興味を持つものであり、一度は競技場に行きたい気持ちが生じることです。無理に起こさなくても、自然に地域球団を応援する雰囲気を作る。こうしてこそ長続きする忠実なファンになります。

大邱の挑戦がぜひ成功して欲しい。これは K リーグ全体で地域社会と共生して、都市再生に大きな役割を果たすことができるという自信を植え付けるきっかけになるでしょう。大邱のコラボレーションに大きな拍手を送ります。

*出典：<http://sports.donga.com/3/all/20190514/95525121/3>

INFOMATION

体育市民連帯 ソウル市 瑞草区 瑞草洞 1485-3 スンジョンビル 305 号

체육시민연대 서울시 서초구 서초동 1485-3 승정빌딩 305 호

Tel : 02-2279-8999、E-mail : sports-cm@hanmail.net

ホームページ：<http://www.sportscm.org/>

日本語訳：佐藤好行 新日本スポーツ連盟 国際活動局 韓国担当 jr1fep@gmail.com